

皮膚科のトリビア

243

浅井 俊弥(浅井皮膚科クリニック)

<http://www.asai-hihuka.com/trivia.html>

トリビア(trivia)=3を意味するtriと+道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにでもある場所」,そこから転じて「瑣末なこと」となり,今では雑学的知識,豆知識,などを意味する言葉として定着している。

本欄は,小誌・浅井編集委員が学会・研究会などで見聞きした「皮膚科のトリビア」をその都度まとめ,連載しています。ご意見等ございましたら,ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

●第123回日本皮膚科学会総会から

令和6年6月6日

抗癌ウイルスによる メラノーマの治療

単純ヘルペスウイルス1型(HSV-1)の3つのウイルス遺伝子に人為的変異を加え,正常組織を傷つけず,腫瘍細胞だけで増殖するように工夫した,第三世代の癌治療用ヘルペスウイルス(G47Δ)がある。そこにT細胞依存的な免疫反応に不可欠なIL-12を組み込み,抗腫瘍免疫を強力に高める機能を付加した抗癌ウイルス, T-hIL12を作成した。T-hIL12を腫瘍に感染させると, T-hIL12が増殖→腫瘍細胞を破壊→増えたT-hIL12が周りの腫瘍細胞に感染→T-hIL12が増殖→腫瘍細胞を破壊, を繰り返して腫瘍を縮小させると期待される。現在, 切除不能または転移がある悪性黒色腫の患者を対象として医師主導治験が実施されており, 安全性と抗PD-1抗体に上乗せした際の有効性を検証中である。

一言コメント

「信州大学病院皮膚科で行っているとのこと。成果に期待したい。」

●第123回日本皮膚科学会総会から

令和6年6月6日

熱傷の新規治療技術と治療薬

熱傷治療に関する新規治療技術の紹介。2007年からは自家培養表皮, ジェイス®が保険適用になった。2022年には自家細胞懸濁液作成キットの

RECELL®が使用可能になった。RECELL®は専用デルマトームで8/1,000インチの皮膚をシェイプし, すぐさま酵素処理を行い, 表皮細胞, 線維芽細胞を個細胞単位に分離し, それを潰瘍に散布するという機器。さらに2023年には壊死組織除去のためのパイナップル茎搾汁精製物ゲル製剤, ネキソブリッド®外用ゲルが発売された。壊死組織に外用被覆し, 4時間後に外すという用法である。

一言コメント

「値段をみて驚いた。RECELL®は自家皮膚非培養細胞移植術, 25 cm² 3,520点などが請求可能だが, 1キットで836,000円, ネキソブリッド®は1瓶 5gで162,993円だった。開業医では使えそうもない。」

●第123回日本皮膚科学会総会から

令和6年6月6日

C1インヒビター活性が正常な 遺伝性血管性浮腫の診断と治療

C1インヒビター(C1-INH)活性が正常な遺伝性血管性浮腫(hereditary angioedema : HAE), HAE-nC1INH診療アルゴリズムは, 2019年の日本補体学会が作成したものが用いられている。家族例がある場合には遺伝子解析が行われ, プラスミンなどに遺伝子変異がみつかることがあるが全例ではなく, 診断が極めてむずかしい。検討した5家系15症例の初発から診断までの期間は平均13年と長かった。15例中11例で用いられたオンデマンド治療(C1インアクチベーター製剤静注やブラジキニンB₂受容体拮抗薬)は全例で有効, 長期予防薬も7例中6例で発作回数を減少させた。

一言コメント

「ただし、こういった治療薬が奏効しない例もあり、また、喉頭浮腫や腸管壊死などの重篤な合併症も起こりうるので、専門医療機関でしっかりフォローしてもらいしかなさそうである。」

●第123回日本皮膚科学会総会から

令和6年6月6日

ネモリズマブ投与後に生じた水疱性類天疱瘡

2施設からの報告。①80歳代男性、上肢、体幹の紅色丘疹が難治で、アトピー性皮膚炎の診断のもとネモリズマブを導入した。痒みは改善したが、2回目投与後に四肢に緊満性水疱が新生。生検では好酸球浸潤を伴う表皮下水疱で、蛍光抗体直接法で、IgGの基底膜部に沈着があり、水疱性類天疱瘡(bullous pemphigoid: BP)と診断した。抗BP180抗体は陽転化した。②70歳男性、2年前からDPP-4阻害薬内服中。アトピー性皮膚炎に対し、ネモリズマブを開始。2回目投与後から四肢に紅斑と水疱が出現。抗BP180抗体も上昇した。ネモリズマブが発症に関与した可能性がある。

一言コメント

「高齢者だし、もともとBPだった可能性も否定できないと思った。さらに高齢者の痒みを伴う丘疹、小結節主体の病変では結節状類天疱瘡も鑑別も必要になる。糖尿病治療薬のチェックも必要。ネモリズマブの副作用としての中毒性紅斑との関連もありそう。念のため、高齢者の結節性痒疹、あるいはアトピー性皮膚炎でネモリズマブを使用する前には、抗BP180抗体、抗BP230抗体のチェックはするべきだと思った。」

●第123回日本皮膚科学会総会から

令和6年6月6日

Hailey-Hailey病にはアプレミラストが有効

50歳代の女性、15年前から間擦部にびらん、亀裂を伴う湿潤性の病変があり、Hailey-Hailey病(HHD)と診断した。2週間の内服でびらんはほぼ乾き、改善を認めた。文献的にはこれまで16症例に投与されていて、11例で改善を認めている。

一言コメント

「いい話を聞いた。治療に困っている高齢者のHHDにさっそく試してみた。が、消化器症状のため残念ながら治療継続が困難だった。代わりにジファミラストの外用を試してみたが、あまり有効ではなかった。」

●第123回日本皮膚科学会総会から

令和6年6月6日

稗粒腫様特発性皮膚石灰沈着症という病名

Down症候群の10歳代の女性。5歳ごろから両側下眼瞼に白っぽいものを中央に配する小結節があった。生検では局所的な表皮肥厚と表皮下のカルシウムの沈着があり、稗粒腫様特発性皮膚石灰沈着症と診断した。汗管腫の合併もあり、いずれもDown症患者に多いことが知られている。

一言コメント

「Down症がなくてもこの疾患はときどき経験する。こういう病名があることを知らなかった。英語ではMilia-like idiopathic calcinosis cutisというそう。汗の生成、分泌の失調のために一過性にカルシウムの析出がおこって表皮内汗管に沈着し、一部は真皮に滴落するとともに表皮外にも排出されると説明されている。まさに臨床もその通りだと思った。」

●第123回日本皮膚科学会総会から

令和6年6月6日

クマによる外傷

秋田大学病院からの報告。クマによる外傷が増加している。高度な挫創と眼球損傷が多い。本州に生息するツキノワグマは、成獣の体長が1.2~1.5 mで、立ち上がるとちょうど成人の顔面の高さに被害が生じる。一方、北海道のヒグマはツキノワグマより大きく、成獣の体長は1.8~2.5 mに達し、したがってヒトと対面した場合の外傷は頭部に生じやすい。

一言コメント

「秋田県では2023年の1年間で、クマの人的被害が70件に達したとのこと。今後もさらに増えそうだ。」